

空



2015・8

SORA 62号

糸田 宮井 知英

梅雨深し木々は押し合ひ凭れ合ひ
雛鶏に鶏冠の出て来し夏初め
薔薇咲かせ薔薇に酔ふ日々はじまれり
何もせぬ何も出来ぬ日髪洗ふ
昼寝覚確と地球に着地せり

大宰府 山本 則男

枇杷の実も実梅も青し母逝けり
裏山に駒鳥のこゑ出棺す
母逝きて夏鳥のこゑゆきわたる
夏暁や死装束に立て結び
昼顔のほとりに母の死に化粧

粕屋 吉田 葎

蛭路地にまうしまうしと日の盛
晴天の岬ひきずる昆布干
学僧の舐むるがごとく草むしる
葎戸してふるさとの山改まる
花火果て髪飾りまだ揺れてをり

福岡 矢野 百合子

ゆつたりと鯉はめぐれり梅雨晴間
噴水の止まりて人はちりぢりに
歓声の渦の芯より昼寝覚
雲水の棒のごと立つ炎天下
廃校の目覚めしごとく合歓の花

新宮 井浦美佐子

夜の守宮厨の窓に日々透けて
ものごころつく頃知りしほたるぶくろ
雨やんで真直ぐに來し黒揚羽
青田風ローカル線の大きな弧
尾根雲や田植機だけが動きをり

福岡 山内 碧

山よりの風吹き抜くる円座かな
昼寝より覚めて他人のごとき顔
舌を出す浅蜷のちよんと叩かるる
うつし世を離れ湖心のボートかな
背伸びして塀越しの樹へ捕虫網

福岡 樋口みのぶ

ペンギンの脚長く描く四月馬鹿
花過ぎの男ばかりのめし屋かな
研げばまた切れる包丁日脚伸ぶ
虫干しに加へし母の句帳かな
漬物の切口揃ふ涼しさよ

須恵 苑 実 耶

蛍の夜後部座席に子の眠り
朝には何のことなき螢籠
蟻の列礎石大きく迂回せり
五月晴れ法要の座に泣く赤子
昼寝覚しばらく眼定まらず

熊本 松田 明子

駆けて来し子の真つ新な祭足袋
町内を子ども神輿のひとまはり
雑踏を抜けて五月のカフェテラス
民芸館に寝かせてありし竹婦人
家移りのたびついてくる竹婦人

糸島 小林 朱夏

縮むごと眠る母なり半夏生
蜘蛛の囿へ紙飛行機の突つ込みぬ
三伏や静脈探る注射針
井戸水に廻り始むる西瓜かな
野良猫の声の混じれる野分かな

粕屋 秋 千晴

水無月の木に埋もれたる生家かな
見廻りの男を映す植田かな
一面の植田となりて迷ひたる
小判草挿す時にまた揺らしみる
後ろより呼び込み聞こゆ花氷

千葉 原 友子

白日傘腕より細く畳まるる
老鶯と波長の合ひし畑仕事
露の皮まだ地下足袋のまま剥く
白靴や好きな木蔭に好きなかだけ
わんぱくの顔が吸ひつく箱めがね

福岡 田代貞枝

鉄橋の闇は汽車待つ秋隣

包丁を研屋に預け梅雨に入る

江の電に触れさう雨の濃紫陽花

どこも農継がぬ子ばかり麦の秋

夫はもうはるかなる国時計草

長崎 松尾龍之介

明け透けの本堂抜けて青葉風

三代を経て藤の根の龍と化す

ぎしぎしや引込線の錆レール

読み止しの本伏せてありハンモック

桜桃のつまめば返す弾みあり

福岡 白水良子

サングラスかけし歩幅となりにつけり

葛饅頭湧き水走る武家屋敷

ひと叢の紫蘇はそのまま庭手入れ

大夕立たたき潰すや連山を

夏霞穂高と思ふ方を見て

兵庫 石川叔子

地の熱を奪ひし雨や花茨

どしや降りの一気に晴るる臯月かな

葉柳の影あざらけし眼鏡橋

夏帽のつばさを押へて島めぐる

緑蔭の四方にテーブル賑はへり

京都 天谷翔子

蓮の葉に蓮の花びらはらりはらり
罌粟の昼クレオパトラとすれ違ふ
サンダルの片方脱げし茅の輪かな
沙羅の花数へゐる間にひとつ落つ
せつかちは相も変はらぬ生身魂

福岡 栗原京子

信長も抱かれて山笠やまがさの飾り付
異邦人拜んでゐたる飾山笠
山笠迎ふ女衆おんなごし間口広くして
大通り山笠の男ら占拠せし
山笠走る神も仏も守護として

大阪 田岡千章

菖蒲活く抜身の反りをそのままに
一航を五分の渡船夏初
ぼうたんや大きな嘘は許しておく
迂薄暑画鋏のみなる掲示板
豌豆剥くぶつきらぼうな返事して

大阪 青木朋子

島畑の低き頂夕立雲
家家に水瓶据る葭簀かな
湖からの風まつすぐに夏のれん
鮎鮎は漁家の宝と甕を抱く
鮎鮎を頂く絢爛たる仏間

東京 今井春生

郭公や土の匂ひの野菜買ふ

雑踏にまぎれこんだる黄金虫

象の鼻右に左に蠅一匹

初夏のをんなの首の長さかな

パイナップル机の上に王のごと

北海道 押田裕見子

釣り上げし魚の尾鰭の跳ねて夏

目隠しの見えてゐるやも西瓜割

二語文を得意顔して裸の子

湯上りの子を捕まへて天瓜粉

日焼子をよく眠らせる青畳

山梨 野畑さゆり

白シャツの一団まぶし応援歌

教へ子の颯爽と来る夏帽子

夕立や一坪農園活気づく

登山靴風通したる晴間かな

老鶯や信濃の宿の自在鉤

福岡 吉村 撰 護

父母の写真の下で新茶汲む

後輩は白木の箱や早梅雨

音も無く搔いて水飯流し込む

炎昼やダムの底なる鬼瓦

螢雪の功と縁なき端居かな

東京 山田正子

海開ききのうのままの水平線
浮きたがるコップの中の水中花
瓢咲く子規の机の万年筆
青葉闇首に真珠の冷えのあり
晩年はいつ沙羅の花散りにけり

福岡 あさなが捷

雷や天の岩戸は静もれり
吊革を傾け停車花カンナ
サルビアや我がまま過ぎて若過ぎて
青嵐遊ぶ約束して別る
顛末を見てしまひたる昼寝覚

福岡 亀井紀子

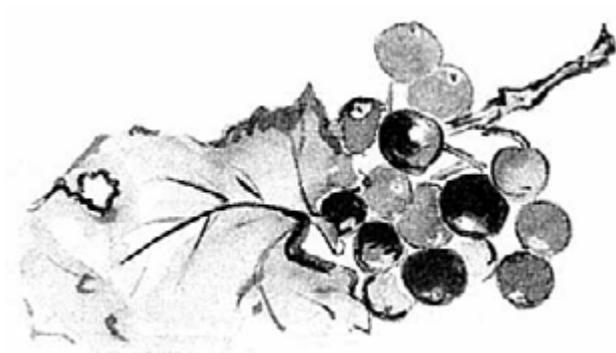
選ばれしことの恍惚レース編む
蜘蛛の巣を両手で払ふ日午なり
猿逃げて町騒がしき芒種かな
青簾静かな町の真中にて
神宿る島を遥かに夏つばめ

東京 遠山のり子

雲の峰風の運びし水の音
白髪もみえてあみだの夏帽子
交差点若人あふるる夕薄暑
用水路の水に勢ひ青田風
桐の花久しく人の住まぬ家

東京 古川 夏子

ひと窓のステンドグラス夏館
草むしる長きエプロン膝包む
塔頭に人声のあり夏椿
遠雪溪水車のこぼす水の糸
教卓にひまはり一本時間表



空作品評

柴田佐知子

青あらし早瀬は穢れ寄せつけず 原 友子

水筒のさいご逆さに雲の峯 //

一句目、川はいろいろな表情を見せる。深い所では淀んだように緩やかに、岩場では揉みあう様に流れてゆく。そして早瀬はへ穢れ寄せつけず…：水の速さが別の言葉で歯切れよく表現されている。優れた言語感覚である。

二句目、水筒を逆さまにして最後の一滴まで注ぐ。逆さまになった水筒かち一気に聳え立つ入道雲に視線が移る。遠近の実景のみで、日の盛りが力強く描かれている。目を射られるような眩しさが溢れる鮮やかな作品。

灯を消してぐらり漕ぎ出すほたる舟 永淵 恵子
ほたる舟一番星へすべり出す 千波 悠

お二人で吟行されたのであろうか。螢を見るための舟が漕ぎ出す様子がそれぞれ具体的に詠みとめられている。

恵子さんの句の眼目はへぐらりへにある。岸を離れる一瞬を共に体感する作品である。

悠さんのへ一番星へすべり出すももうまい。へ一番星へだけでまだ明るさの残る風景が、へすべり出すへによって穏やかな水面が見えてくる。それぞれに焦点が絞り込まれ巧みだ。

鬼灯やゆつくり母になればいい あさなが捷

初めての出産・子育ては不安なことも多いだろう。語り掛けるようなさりげない中七・下五に、子育てを経験した作者の穏やかな思いやりがこもっている。

壹萬里泳ぎても此処金魚玉 栗原 京子

「金魚玉」は卓に置く「金魚鉢」と異なり、球形のガラス容器で軒先に吊るす。金魚はあらゆる方向から見られながら、狭い金魚玉の中をひらひら泳ぐ。へ壹萬里泳ぎても此処へとの表現を得た作者の清新な感覚に驚く。上五に据えられたへ壹萬里へという誇張した措辞と金魚との配合の意外性が、類句を超える力となっている。「金魚玉」と言えばすぐに思い浮かぶインパクトのある作品である。へ以下略へ

空集

柴田佐知子選

羽抜鶏盗人歩きに小屋を出る

水飲んで鴉艶ます若葉寒

灯に垂るる紐に風見え更衣

麦秋や父を励まし我もまた

螢火を追ひて行方の知れぬまま

母のものまだ残しぬて更衣

ラムネ飲む転がるやうな少女たち

夏草の中の近道選びけり

存分に恨みを晴らす夏芝居

手花火の終りは息をつめてをり

灯を消してぐらり漕ぎ出すほたる舟

ほたる舟闇に引かれて進みけり

ソーダ水優しい嘘をつかれけり

これよりは急坂となる大暑かな

時々は向きを変へやる竹夫人

出来ること日毎に増えて天瓜粉

桐下駄に五指の吸ひつく素足かな

かぼちや蔓邪険に向きを変へらるる

葉を覆ふほど南天の花の屑

青あらし早瀬は穢れ寄せつけず

鮎焼く火音をたてずに崩れけり

荒梅雨やレールへ迫る草の波

とんぼうを見てぬて眼細くなり

水筒のさいご逆さに雲の峯

苗を挿すたび胸ぬらす深田植

流れ苗水口に来て立ち上がる

草刈つて野鼠の巣に日が当る

家ごとに川の水引く冷し瓜

千葉 原 友子

北九州 深川 淑枝

福岡 高倉 和子

福岡 永淵 恵子